

研究主題 “Have 構文” における使役性について

要約： 本研究では、英語の“*have* 構文”における「使役性」の有無を検証する。*have* は通常 *make* や *let* とともに使役動詞の一つとして捉えられているが、他動性の低い *have* に使役の概念が本当に内在するのかどうかについて議論する。*have* 構文には「使役」や「受身（経験）」のように異なった意味があると言われているが、これらの概念が一つの語に共存するとは考えにくい。そこで、*have* 構文の表す意味をよりの確に表現する包括的な説明を提案する。

学校教育の現場や先行研究を概観した上で従来の *have* 構文の扱いにおける問題点を指摘する。そして、映画スクリプトから抽出した *have* 構文の事例を取り上げ、文脈情報を拾い出しながら詳しい解釈を行い、*have* の表す本当の意味を探り出していく。

キーワード： *have* 構文、使役、involvement、モダリティ

I はじめに

高等学校の英語で学習する *have* + 目的語 + 補語という形の構文（以下 *have* 構文）は「使役」を表すとされており、たとえば、“The teacher had the students fill out the form.” (*Power On English II*, 2003) のような文が典型的な例として教科書に掲載されている。この構文は統語的知識を問う文法問題として取り上げられることが多いが、その表す意味は生徒にとって決してわかりやすいとは言えない。そのわかりにくさは次の2点に集約される。1つは、*have* は

make や *let* とセットになって使役動詞とされているが、それぞれ意味がどう異なるのか区別がはっきりしないということであり、2つめは補語に原形不定詞の他に分詞がくることもあり、特に“I had my money stolen on the train.” (*New Legend English I*, 2002) のように過去分詞形の場合は使役ではなく受身的な意味を持つとして混乱を招きやすいということである。1つめに関しては、通常は「*let*・*have*・*make* の順に強制力が強くなる」(*Planet Blue English II*, 2003)、「*have* は依頼を表し『～してもらう』

の意味を持つ」(LovEng English Course I, 2006) のような説明が与えられているが、実際にはそれに当てはまらない事例もあり、必ずしも納得のいく説明にはなっていない。また、2 つめについては同じ *have* という動詞を使った構文でありながら、ある時は使役、またあるときは受身というように全く異なる概念を当てているという統一感に欠ける説明になってしまっており、生徒が混乱するのも無理からぬことと思える。

学校文法に限らず、英語学者の間でも *have* を使役動詞として扱うことが定説となっている。Oxford English Dictionary (O.E.D.) を始め、ほぼすべての英語辞書は *have* に *causative* (使役) の意味を認め、*have* を扱った先行研究では使役の意味を前提にしている。しかしながら、*have* 構文は使役を表すとした従来の説明では、学習者にとって理解しやすいとは言えない状況であり、*have* を使役動詞として扱うことが本当に正しい意味を表しているのかどうかを根本から見直す必要がある。本研究では *have* 構文の具体例として映画のスク립トからの事例を使い、それらを詳細に検証することによって、英語のネイティブスピーカーが実際どのような意味でこの構文を使っているのかを明らかにし、従来の「使役」に替わる、より適切な概念を提示することを目的とする。

II *have* の低他動性

ある動詞が使役動詞として使われるためには、その動詞に高い「他動性」、すなわち、対象に働きかけてある事態を引き起こす力が備わっていることが必要である。ところが *have* は高い他動性を有しているとはいえないことが次の2つの事実からわかる。第1に、Hopper & Thompson (1980) が示した他動性の指標にしたがって (a) *Mary had a new doll.* と (b) *Mary made a new doll.* という2つの文を比較してみると、(b) の *made* はすべての項目において高い他動性を示しているのに対し、(a) の *had* は有意志性、動作主性、被影響性という項目に対しては他動性を示していない。第2に、*have* は統語上目的語を取る動詞にもかかわらず通常受動態にならない。これは *have* の目的語が、*have* という動詞によって何らかの働きかけを受ける対象として認知されておらず、そのため、その目的語を主語にした受身の文が成立しにくいからである。このことは、言い換えれば、*have* の他動性が低いということになる。

先に述べたように、使役動詞には高い他動性が必要とされるにもかかわらず、*have* のような他動性の低い動詞をその使役動詞のカテゴリーに入れている従来の説明には大きな疑問を感じざるを得ない。仮に使役的な解釈がなされるとしても、それは動詞 *have* の持つ意味ではなく、何らかの別の要素から推論されるものではな

いだろうか。そこで、次に実際に have 構文の使用例を取り上げてその詳しい解釈を試みる。

Ⅲ 事例検証

SCREENPLAY (<http://www.screenplay.co.jp>)というサイトから以下の4つの事例を選び、文の解釈を行った。その際、文の主語と目的語+補語で表される事態との間に causative (使役)と言えりような因果関係があるのかどうか、またそうでなければどのような関わり方をしているのかという点を詳細に観察した。

- (1) His friends in high places had me kill it. (*Pay It Forward*, 2000)
- (2) And you had George lie to us. (*Stuart Little 2*, 2002)
- (3) When I fly, I will have you know that my crew and my plane come first. (*Top Gun*, 1986)
- (4) You had me worried there for a moment. (*Anne of Green Gables*, 1985)

(1)では、知事の友人(His friends)が新聞記者の話者に圧力をかけて記事を書くのをやめさせたという流れになっているが、諦める決心をしたのはあくまで話者(me)の自発的な行為であり、His friends が直接の原因とは認められないことがわかった。また、His friends は‘me kill it’という行為によってスキャンダルを暴露されずに

済んだという、一種の恩恵を受けた関係になっている。

(2)では、主語の you が George に対して「嘘をつかせる」という何ら物理的な行動は行っておらず、また、you と George は同じ場所には居合わせないため George の自発的な行動に任せている。そして you は‘George lie to us’という行動のおかげで自分の目的を果たすことができたというように話者に認識されている。

(3)では、主語の I が ‘you know’という事態を引き起こすということはそもそも不可能であり(もしできるとしたら、それは人の知的能力をコントロールしていることになる)、具体的な行為ではなく「相手にわかってほしい」という自分の気持ちを述べた文になっている。

(4)では、教え子の緊張した姿を見て、気にかけてあげたという教師の思いやりの気持ちを述べており、主語の You が意図的に話者に心配させたという使役の意味は全くない。

Ⅳ have 構文の概念 ‘Involvement’

have 構文の事例を検証した結果、次のことが明らかになった。a) 主語と事態との間に直接の因果関係はない。「誰かに何かをさせる」というような物理的、直接的な行動は意味されておらず、結果的に主語が事態の発生に関与していても、直接の原因である保証はない。使役の解釈は社会的な人間関係などの文脈から推測されたも

のにすぎない。b) 主語と事態とが相互に関わり合っている。本来の使役であれば、主語から対象へと、事態を発生させるようなエネルギーの伝達があるが、*have* 構文ではそのような一方向の働きかけというよりも、主語と事態とが相互に絡み合う関係になっている。そして発生した事態が主語にとって何らかの意味を持つものとなっている。c) *have* 構文の話者の意図は、実際に起こる（起こった）出来事や事実を描写するというよりも、主語と事態とがどう関わっているのかについてのコメントを話者の視点から語る、というところにある。

以上のことから、*have* 構文の意味をより正確に表す統一的な概念として、従来の「使役」や「受身（経験）」に替わって ‘Involvement’（「関わり」）という概念を提唱する。*have* 構文は、主語が事態との多様な「関わり」を話者の視点を通して叙述しているものである。話者は主語と事態とを個別に認識し、両者の関わり方を話者の見解を込めて表現している。そして、この表現は出来事の描写というよりも話者の見解や心的態度を表しているという点で、モダリティ的な表現であると言える。

だが一方、*have* 構文は、意味が文脈に依存する度合いが大きく、特定の日本語訳では表現しにくい。*have* に込められた話者の気持ちを理解するには文脈情報をきちんと捉え、行間を読み取るような深い解釈が必要とさ

れるため、より高度な表現であると言える。このため、学校現場での取り扱いをどうすべきかについてはさらなる研究が必要であり、今後の課題としたい。

参考文献

Hopper, Paul J, and Thompson, Sandra A. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56.2, pp. 251—299.

(参照教科書)

LovEng English Course I.
2006. Keirinkan.
NEW LEGEND ENGLISH I.
2002. Kaitakusha.
Planet Blue English II.
2003. Obunsha.
Power On English II.
2003. Tokyo Shoseki.